

藤田先生のご講演を通して得た最大のものは、“意識しなければ見えないようにされているものを、自分から見たいかなければならない”という危機感です。とりわけ自分をもっと知らなければいけないと感じたことは、日本を相対化して見ることの重要性でした。以下ではこれについて藤田先生のお話から考えさせられたことを述べます。なお、これを困難にしている大きな要素の一つがメディアの在り方であり、報道の独立性が担保されない国に生きることがいかに危険であるかということも、その授業から得た大事な学びでした。

“解消できるならそれに越したことはないが、それ程度の理不尽さは生きていく上で許容すべきではないか”と感じていた日本国内の問題を、海外と比べるとそれが異常なものでありうると捉え直す視点を藤田先生のお話から学びました。私にはそれまで、生きるにはその場で既存の規範に順応するよりほかないという意識がありました（今もそこから完全には逃れていません）。これは先述のように、国際社会の中に自分を据える機会がなく、その重要な機会を実は掴み損ねているのだという危機感を自ら持つこともまたなかったことが原因であると考えています。国内の問題の一例として、日本の高額な大学授業料が格差を助長するとしても、その状態が硬直しているのであれば日本ではそれは仕方のない問題なのだと捉える感覚がありました。しかし学費に対する給付奨学金の額を併せて考えると日本の状況は OECD 最低水準であると知り、選挙委託金の問題や、感染症に関して医療従事者への差別の問題など他にも日本固有の問題が多く存在することを示される中で、国内の状態に盲目に順応しないこと、小さな社会の中でそれが通念であるか否かに囚われないことが、その社会を変えていく一員として大切なのだと気付かされました。さらに、現在の日本にある個々の問題の背景にはもっと根本的な問題があるのではないか、という視点をこれにより持ちうるのだという実感を得ました。

最後に、以上のような、机上から始まる学問以前の問題、どのような視点を持って自分を取り巻く社会を見るのかという大きな問題を、国際的に活躍されている方から直接お話いただく機会が私にとっては大変貴重なものであったということを記させていただきます。